参考資料

美学のいろは第一回2010年10月3日

ヒューム『趣味の基準について』（1757年）

権威（authority）や先入見のために、悪しき詩人や弁論家が一時的に流行することもあろうが、その名声もけっして持続的ないし一般的とはならないであろう。・・・・・・〔他面、真の天才に関していえば〕羨望と嫉妬は狭い範囲のうちでは力を持っているが、・・・・・・こうした障害が除去されると、自然本性的に（naturally）快い感情を引き起こすことのできる美点は、直ちにその力を発揮する。（233）
[小田部訳 106]

批評家は自己の精神をあらゆる先入見から自由に保ち、自分が吟味しているまさにその対象以外のものが自己の考察に紛れ込まないようにすべきである。あらゆる芸術作品はそれにふさわしい効果を精神に対して発揮するためには、ある特定の視点において眺められるべきであって、ある人の状況が――現実であれ想像上であれ――この作品が要求している状況に適合しないならば、その人はこの作品を十分に味わうことはできない。〔その理由は次のとおりである、すなわち〕ある弁論家は特定の聴衆に向かって演説するのであり、その聴衆に固有の特質、関心、見解、情念、先入見を考慮しなくてはならない〔のであるから〕、もしも異なった時代ないし国の批評家がこの弁論を熟読するのであれば、その批評家は、この弁論について正しい判断を下すために、こうしたあらゆる状況をすべて考察に入れ、自己自身を聴衆と同一の状況に置き入れる必要がある。同様に、ある作品が公衆に向かって示される場合には、仮に私がその著者と友人であろうとも、あるいは敵対していようとも、私はこうした状況から離れ、私を人間一般とみなしつつ、可能であれば私の個的存在、私の特殊な状況を忘れる必要がある。ところが、先入見によって影響を受けている人は、こうした条件に従うことなく、自己の普段の〔すなわち先入見・歴史的条件によって与えられた〕立場に固執し、自分をこの作品が前提としている視点へと置き入れることがない。ある作品が〔自分とは〕異なった時代ないし国の人々に向けられたものであるときにも、この〔先入見によって影響を受けている〕人は、こうした〔他の国の、あるいは他の時代の〕人々に固有の見解や先入見を認めず、むしろ自分の時代や国の風習しか考えないために、その弁論のそもそもの聴取にっては賞賛に値すると思われたものを非難する。（239）
[小田部訳 108－109]

ブルデュー『ディスタンクシオン』（**1979**年）

正統的文化に関わる趣味を自然の賜物と考えるカリスマ的イデオロギーに反して、科学的観察は文化的欲求がじつは教育の産物であることを示している。・・・・・・つまり諸芸術の、そして各芸術の内部では諸ジャンル、諸流派、諸時代などの社会的に公認されたヒエラルキーにたいしては、消費者たちの社会的ヒエラルキーが対応している。だからこそもろもろの趣味は、「階級」を示す特権的指標として機能する傾向をもつのだ。（4）

趣味は分類し、分類する者を分類する。社会的主体は美しいものと醜いもの、上品なものと下品なもののあいだで彼らがおこなう区別だて（ディスタンクシオン）の操作によって自らを卓越化するのであり、そこで客観的分類＝等級づけのなかに彼らが占めている位置が表現され現れてくるのである。（19）

カント『判断力批判』（**1790**年）

快適なものに関しては、誰もがこのくらいのところで満足しているのである、即ち――この場合に彼の判断は、個人的感情に基づいている、それだから彼がこの判断によって対象について言えるのは、その物が彼にとって快よいということだけである。・・・・・・ところが美については、事情はまるで違ってくる。仮りに自分の趣味のよさをいくらか自負している人が、自分の考えの正しいことを証明するつもりで、『この物（我々の見ている建物、彼の着ている衣服、我々の聴いている演奏会、批評を求めるために提出された詩等）は、私にとっては美しい』と言ったとしたら、（快適の場合とはまるっきりあべこべで）いかにも笑止であろう。もしその物が、彼に対してだけ快いものなら、彼はそれを美と読んではならないからである。・・・・・・いやしくも彼が何か或るものを美であると主張しようとするならば、彼は他の人達にも彼とまったく同じ適意を要求することになる。（86-87）

マーゴリス『芸術と芸術批評の言語』（**1965**年）

哲学者達は「美的」という言葉を統一したやり方、もしくはいくらか独特なやり方で統一的に使われていると考えることで、誤った考えに至っている。（12）

ウィトゲンシュタイン『美学、心理学および宗教的信念についての講義と会話』（**1966**年）

この主題（美学）は非常に大きく、わたしの見るかぎり全く誤解されている。〈美しい〉といった語の使用は、それが現れる文章の言語形式に着目する場合には、他の大多数の語よりもいっそう誤解されやすい。〈美しい〉は形容詞であるから、「これはある種の性質をもっている、美しいという性質だ」と言いたくなってしまう。・・・・・・一つの語を論ずるときにわれわれがいつも行うことの一つは、それをわれわれがどのように教えられたのかと問うことである。・・・・・・子供がどのようにして〈美しい〉〈きれい〉などを学ぶのか自問してみれば、子供はそれらをほぼ感歎詞として学ぶことがわかる。（128－130）

シブリー『美的概念』（**1959**年）

我々は、ある小説について、それが多くのキャラクターが登場し、製造業の町の暮らしがある、と言う。ある絵は薄い色を使い、主に青と緑を、そして前のほうにひざまついている姿がある。フーガのテーマはその点で反転し、終始部には対応部がある。演劇のアクションは、一日のスパンの中で起こり、第五幕で和解のシーンがある。そのような主張は、そしてそのような特徴は、健全な目と耳と知性があるものなら誰にでもなされ、指摘されるだろう。一方で、我々はまた言うだろう、ある詩は緊密に編まれており、深く感動的だと。絵はバランスが欠けており、ある種の静かさと安らぎを持っている、もしくは、その姿形の集まりは興奮的な緊張感を作っている。または、小説のキャラクターは活気が全然ない、あるいは、あるエピソードはまったくの興ざめである。そのような判断をなすことは、趣味、感得能力、感受性の行使、美的識別力や鑑賞力の行使を必要とすると言うことは、十分に中立的だろう。そして、私の最初のグループには、このことを言わないだろう。したがって、言葉や表現が、それを適用するために、趣味や感得能力が必要とされるようなとき、私はそれを美的な用語、表現と呼ぼう、そして対応的に、美的な概念もしくは趣味的な概念について語ろう。（1）

参照文献

- 小田部胤久『西洋美学史』、東京大学出版会、2009年
- ブルデュー, ピエール『ディスタンクシオン：社会的判断力批判』、石井洋二郎訳、藤原書店、1990年
- カント『判断力批判』、篠田英雄訳、岩波文庫、1964年
- Hume, David. "Of the Standard of Taste"(1757), in, *Essay Moral, Political, and Literary*, ed. and with a forward, notes and glossary by Eugene F. Miller, Indianapolis, 1987
- Sibley, Frank. 'Aesthetic Concepts', *Philosophical Review*, 68 (1959), 421-50 (revised version in Joseph Margolis, ed., *Philosophy Looks at the Arts* (Philadelphia: Temple University Press, 1978), 64-87).
- Margolis, Joseph. *The Language of Art and Art Criticism*, (Detroit: the University of Cincinnati, 1965)
- ウィトゲンシュタイン『ウィトゲンシュタイン全集10』、藤本隆志訳、大修館書店、1977年

美学入門の文献紹介（日本語のみ）

- 簡単な読み物、エッセイ

    - 佐々木健一『美学への招待』
    - 佐々木健一『タイトルの魔力』
    - 今道友信『美について』

- 教科書的なやつ
    - 酒井紀幸・山本恵子編著『美／学』
    - 西村清和『現代アートの哲学』
    - 小田部胤久『西洋美学史』
    - 佐々木健一『美学辞典』
    - 今道友信『講座 美学』